

令和元年度 第5回人権教育学級

日時：10月10日（木） 9：50～11：50

場所：別府市役所 5F大会議室

演題：「子どもと人権」「医療と人権」「さまざまな人権」

はじめて色覚に出会う子どもたちに

～一人でも多くの人に知ってもらいたいこと～

講師：(別府市立青山中学校 教諭)

色覚学習カラーメイト

代表 尾家 宏昭 さん

講演概要

前半

1 はじめに

- ・色覚検査表を使っての色覚検査が2002年度から廃止になったが、今日は、色覚について考えていただきたい。
- ・前半はいろいろな見え方や感じ方を体感していただき、後半は、色覚に関わる人権の話をしたい。



<講師の尾家 宏昭 さん>

2 見えるということ、感じるということ

○わたしたちのご先祖さまが得た超能力!?

6億年前・・・このころ目を持った生き物が生まれる。→やがて、水の中で手や足ができ、水の中では生活しにくくなる。→陸に上がってくる。→ねずみのような小さな生き物が人間の始まり、目は両サイドにある。→霊長類になって目が前にくる→目が前に来るということは立体視ができるということ。(遠くか近くか)

○目で見て脳が判断・・・錯覚の世界、だまされないように!

- ・ふしぎなドレス
- ・3つの絵
- ・静止画 等の見え方は?

周囲の色や形、その人のもつ色の波長によって見え方が異なる。

見え方は、私たちの頭の中で考えるので、実際に見ているそのものがあると私たちは勘違いしやすい。

<チャレンジ第1問>

☆世の中、たくさん色があるんだけど、何ででしょうか？

チョコちゃん流に解説すると・・・

「世の中にたくさん色があるのは、お日様が私たちに必要な見分ける力をくれたから。」

※チョコちゃん
NHKの番組
「チョコちゃんに
叱られる」

○色を感じる仕組み

- ・お日様からの光を受けて物にあたって反射する。それが目の中に入ってきて、目の奥に頭が尖がった錐体という細胞が、光の波長を感じとって脳に送る。そして、脳が信号を送る3つの錐体の感度から色を考える。

<チャレンジ第2問>

☆シキカクイジョウのイジョウって、何でしょうか？

チョコちゃん流にお答えすると・・・

「多くの人が見落とすものを発見できる特別な能力の色覚」

○見え方・感じ方のちがい

デンマークのコカコーラ社が少数派色覚の人だけが分かる広告を作った。少数色覚は、男性の13人～20人に1人、女性は500人に1人。・・・色覚検査表で読めないから異常と多くの人が思っているけれど、その逆の場合があるということを知ってほしい。

- 「色盲」というと白黒の世界だと思っている人がいまだにいるが、そうではない。多くの人が見分けられる色を見分けにくいというのが「色覚異常・色盲」と言われるが、それぞれに違う特徴を持つのであって、存在する割合から多数色覚・少数色覚と表現すべきだと考えている。

○それぞれの能力は最も適した能力

魚類（錐体は8つ）→両生類（4つ）・鳥（4つ）→哺乳類（2つ）それぞれに自分たちに必要な能力としての色覚を持っている。生き物の色覚を考えていくと、人の色覚が優れているのかどうかは、一つの側面だけでは測れない。

○すばやく見つけることができるでしょうか？

◇色々な映像を見て、隠れているものを見つける活動を行う。

少数派の色覚は、多数派の色覚をもつ人が見分けられないものを見分けることができる。

3 色覚はヒトの多様性の一つ

○色覚のちがいをシミュレーションで見ていく。

例えば、

- ・彼岸花のある風景の見え方（赤が見えにくい）
赤い文字が黒板の中では見えにくいという理由がわかる。
- ・海と海草の色の見え方（青が鮮やかに見える）
- ・青い魚の見え方 等

「見分けやすさというのは、他の見分けにくさがある、見分けにくさがあるのは他の見分けやすさがある。」と、考えることができる。

ある物に焦点を当てると他の物が見えにくいということがある。こちらの見え方が正常でこちらの見え方が異常とは一概に言えない。一面だけで優劣はつけられないと世界では理解されている。

少数派の見え方と多数派の見え方がある。少数派の見え方は、多くの人を感じない見え方をする。多くの人が見落とすものを発見できるということ。ただ、人数が少ないために「検査表が読めないこと」が異常であると日本では判断され続けてきた。

○検査でわかること

一般的な検査表は、「仮性同色表」と言われるもので、それ以外にも2つの検査の方法がある。この3つをしないと正しい色覚の検査はできないとされている。しかし、検査をしても、ある色と他の色を見分けられるだけで、どのように見えるかが分かるというわけではない。

○はじめて色覚にであう本と検査のまえによむ色覚の本

検査を再開すべきだという動きが全国各地で進められている。

別府市でも、健康チェックを小4と中2で行っており、その時に色覚検査を実施しているが、約半数の児童生徒が検査を受けている。

子どもたちに色覚検査を受けたことがあるかどうかを問うと、「受けたことがある。簡単や。」と答え、「だれでも分かるのは、当たり前」という空気が流れたことがある。

しかし、20人に1人の男の子、女性の500人に1人が読めない。また、女性の10人に1人が保因者ということで、多くの人に関係しているにもかかわらず、こういう状況がある。この検査表が読めない子どもたちがどんな状況に置かれるか、そこが問題で、そこからこの本を作っただけ広めたいという思いに至った。

◇スマホやシュミレーションメガネで休憩時間を利用して、少数色覚の見え方体験活動を行う。



<実際にシュミレーションメガネで見え方の体験をする受講者>

後半

1 ある一人の少数色覚者の体験から

私が、他の人と色覚の違いがあると思い知らされたのは、小学校4年生の時。図工の時間に描いた絵を担当は、「色を見分けるのが苦手だから、あんな変な絵になった」と説明し、「ね、おかしいでしょう」と付け加えた。笑い声が響き渡り皆の視線を感じ何とも言えない気持ちになったが、そのとき自分自身に何が起きたのかわからなかった。家に帰って両親に泣いて訴えたのを記憶している。

小学生の頃は、毎年出席番号順に並ばされ、検査表を「読まされた」。

教員をしていた父親が、検査表を持ち帰り、目の前で読むように言われた。読めない私を見て、母親は、大粒の涙をぼろぼろこぼした。それを見た瞬間、「この表が読めないということは大変なことなんだ」と悟った。また父親から、「お前は、将来就けない仕事、行けない学校があるから気を付けなさい。お前は理系には進めない」と言われ、心の中にとっても重いものがずしりとのしかかった。

両親は「治療する所がある」と聞き付けて、いそこ2人と一緒に、私を大分市内から電車に乗って熊本の小さな鍼灸医まで連れて行った。こめかみに鍼を刺し、ヘッドホンのようなもので「通電治療」を受けた。しかし、当然「効果」もなく、足が遠のいていった。しかし、近くの内科医にも「色覚異常・色盲を治す」という看板を掲げている所があり、そこにも通わされた。

成長するにつれて、自分自身の色覚がどう違うかということがわかり、「失敗」もうまく避けるようになった。自分にとってそれは「何でもないこと」になり、大学生の頃、自分の色覚について「思い出す」ことなどは年に2～3回ほど。

教員になったある時、職員室である先生が「赤と青もわからんお前は色盲か」と、信号無視をした生徒を怒鳴っていた。たまらず休み時間にその先生のところに行った。

すると、「先生も色盲なん。赤と緑が逆に見えるの？ 赤と緑が同じ色に見えるの？ 先生は黄色が何色に見えるの？」ときかれた。私は「僕には赤と緑はわかるよ。色弱だから」と答えた。健康診断の記録には、毎年「赤緑色弱」と書かれていた。しかし、それ以上のことを何も説明できなかった。なぜなら、私自身が何も正しいことを知らなかったから。

同和教育に取り組む中で「色盲・色弱は病気ではなく個性なのです」と題する講演のチラシが目にとまった。久しぶりに「色盲・色弱」という言葉を見た気がして、聞きに行った。

1998年10月10日、大阪の人権博物館だった。

小学生で自覚した時から30年経って、初めて聞く知識を山ほど得た。自分の無知に驚いた。講師は、名古屋で眼科医をしている高柳泰世さん。いろいろな職業制限をなくそうという取り組みをし、『つくられた障害「色盲」』という本を出していた。

自分自身の色覚が実際どうなのか知りたくて、翌月高柳さんの眼科医院に行った。30種類以上の検査をしたあと告げられたのは「医学的には、第2色盲の強度です」と言う言葉。驚きはしなかったが、帰りの新幹線の中でなんとも言えない気持ちになった。なぜなら、私は「僕には色がわかるよ。色弱だから」と、言っていたからだ。私はこの時まで自分がそうでありながら、「色盲は白黒の世界」だと思っていた。それがとてもショックだった。本人に正しい知識が伝えられていないことへの憤りと、何も疑問に思わず過ごしてきた自分に腹が立った。

翌月また、名古屋に行った。当時、小学校4年生に行っていた検査で「異常」と判定された子どもや保護者を集め、名古屋市教委主催で「正しい知識」を伝える研修会が開催されているのを見に行った。大分でも何か行動を起こしたいと思っていた。

会の終わりになり、壇上の高柳さんに泣きながら訴える女性に目を見張った。

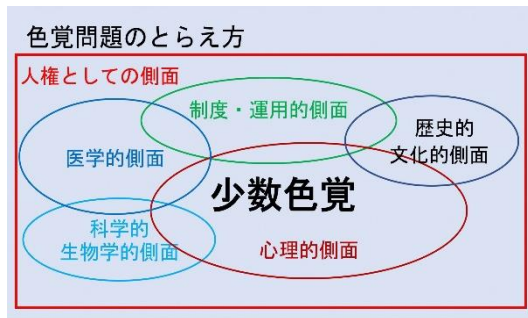
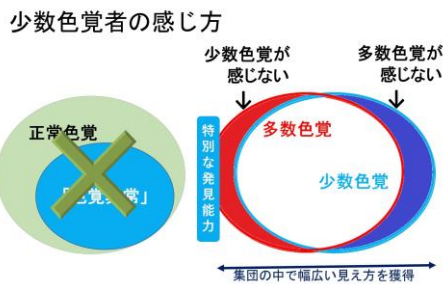
「私は大分から来た。息子が幼稚園の時に色覚異常と診断された。現在小学校2年生の息子は再来年には検査を『受けさせられる』。『異常』と判定されたら、小学校から中学校、中学校から高校にその情報がいく。そして、進路選択や結婚の時に差別を受けるのですね？ それまでに何とか『治したい』。お願いだから、治す方法を教えてほしい」と言って、大勢の前で泣き崩れていた。

インターネットも普及していない当時、名古屋市内のごく一部の生徒と保護者しか案内されない会に、糸を手繰り寄せるように、大分県から3人で来ていた。会が終わり高柳さんと話を聞く。「子どもに聞かせるのはあまりにも不憫なので、父親と一緒に近くの公園で遊ばせている。私だけが聞きにきた。」と、また、涙を流した。「学校の先生に話はされましたか？ 養護教諭には？」と問うと、「とんでもない。なんでそんなことが言える?! 言ったら、全部ばれてしまう。そして、それがずっと上の学校に行く。言えるわけない」と言って、また涙をこぼした。私はそれを見て、30年前の自分の母親をそこに見た。その時、この問題に取り組もうと、私は決意した。

2 2012年の新聞報道～色覚検査復活

日本眼科医会は「色覚異常」を自覚していないのは問題として学校で検査が進めるべきと記者発表。文科省も「希望者は学校で検査できることを周知するよう」事務連絡を出した。

別府市では、小4と中2で行われる「健康チェック」で色覚検査を受ける児童生徒の割合は在籍の約50%。これは県内他の全市町村の割合平均の約100倍にあたる。



3 少数色覚への差別・誤解と偏見の歴史

色覚検査の始まりは、1875（明治8）年スウェーデンで起きた鉄道事故がきっかけ。事故原因は少数色覚の運転士だと結論づけられた。運転士は事故で死亡して確かめようもなかったが、実証実験で「証明」され、検査推進が瞬間に世界中に広まった。2012年、世界的な色覚研究者であるケンブリッジ大学 Dr. J・モロンはこの実証実験が「トリックによる騙し」だと証明する論文を発表し、検査を進める根本的理由の根拠は完全に崩れた。

私はモロン氏から「日本は色覚のちがいを『遺伝的欠陥』といつまでもぐずぐずと捉え続けているのが問題」と指摘された。諸外国で日本のような例はない。

色覚差別を支えた文化として、明治から大正時代にかけての「優生思想」に基づく歴史的背景がある。少数色覚者だけでなく、ハンセン病患者、障がい者など人間に優劣をつけ「劣った遺伝子は排除する」という指導が蔓延した。

明治時代「色盲は目の発育不全」と捉えられ、「治療」や「訓練」で治すことも試みられており、少数色覚者は「金儲けの餌食」にもなっていた。

4 雇用時健康診断の色覚検査の廃止と学校における一律色覚検査の廃止

2001（平成13）年 雇用時の健康診断から「色覚」削除

職場における色覚異常についての正しい認識の促進について（厚生労働省リーフレットより）

<改正の趣旨>

- ・知見の蓄積により色覚検査において異常と判別される方であっても、大半は支障なく業務を行うことが可能であることが明らかになっています。
- ・色覚検査において異常と判別される方について、業務に特別の支障がないにもかかわらず、事業者において採用を制限する事例が見られました。

<措置の内容>

- ・雇用時健康診断における色覚検査を廃止しました。
- ・「色」を活用した安全確保のための識別措置について容易に識別できるように所要の改正を行いました。（化学設備等のバルブ等の識別、鋼管の強度の識別、有機溶剤の区分の表示）

人の色覚はわからない

ある色が「何色に見えるか」は本人以外にはわかりません。ある「色」について、多くの人はおそらく同じように見えているのですが、他人の目で何色に見えるかは厳密にはわからないのです。確実にわかることは、ある色を別の色と区別できるかどうか、ということです。この観点から、区別のできない色の組み合わせがあるかどうかを知ることが、個々人の色覚の特徴について判断できる唯一の方法であり、限界でもあります。

5 ある高校生の例

眼科医「調査報告」では「進路指導において色覚制限のある職業や、不利になる職業があることなど、情報を伝える良い機会を失っている」として「工業高校に在学中の生徒が『学校で検査をしたら異常だった。もっと早くわかっていたら進路を決めるとき違っていたら』という声もある。だから進路決定の前に検査をすべきと述べている。

しかし、この生徒の言葉の中にある「今まで異常を感じたことはなかった。工業高校の電子機械科に通っていて、電気関係の仕事を考えている。」という言葉は省いて紹介している。これは正確な情報伝達ではなく、この生徒が検査表の結果だけで希望の進路をあきらめる必要があるとは考えられない。

6 わたしたちの分析 ～取り組むべき課題はほかにある

「調査報告」にある「事例」を分析してみると次のような結果が出た。

【日常生活・214】 家族の理解に課題があるもの(本人の見え方がわからない、理解できない、心配で受診など)・・・(カテゴリー中の)23.4% 「遺伝に関する心配や不安がある」・・・(以下同じ)12.6%	私たちの分析 当事者家族でも 知識・理解不足
【学校生活・81】 「図工の時間」のこと・・・35.8% 「黒板・板書」に関すること・・・25.9%	検査実施より先に 取り組むべき課題
【進学・就職・92】 警察関係・・・32.1% 進学・・・11.1%、 鉄道関係・・・9.9% 船舶・消防関係・・・各8.6%	厚労省判断が 浸透していない
【仕事・36】 部署変更・・・4.9%(4件) 事業所指示で受診・・・6.2%(5件)	少数色覚だけに あてはまる内容ではない
【その他・75】 遺伝情報・・・70.7%、受診理由・・・22.7%	問題ではなく「情報」

問題となる事例は少なく、もっと優先すべき課題がはるかに多い。

7 カラーユニバーサルデザイン基本のABC

- A だれにも見やすい色使い
- B 色以外に見分ける手がかりを(形)
- C 色の名前当てクイズは避けましょう

(「はじめて色覚にであう本」より)

8 はじめて色覚にであう本で学習した生徒の声

青山中当時2年生の声

- (健康チェックの、時検査表に) 初めは何を書いているのかすらわかりました。

最後の1枚の絵はなんてかいているかわからなくて「どうしよう」と思って、勇気を出して「何も見えません」と医者に伝えると「そのとおり」といわれてホッとしました。

→「読める」ことが正しいこと、「読めない」と困ることという意識が確実に広がっている。

○祖母から「色覚異常はないのか？」ときかれたことを思い出した。母が医療についてくわしいから、その考え方について「今はもうそんな考え方はしていない」と答えたが、祖母は、納得していない様子だった。→家庭にも誤った認識、差別意識は残っている。

○話を聞いて、私の父も色の見分けがつかないことがあるので、そのことを理解して対応したいと思った。わかりやすく教えてくれたのでいろいろ理解できました。

→家族に少数色覚者がいる。家族の理解ができているか疑問。

○多数色覚であっても少数色覚であっても生活の有利などはないと知ってビックリしました。帰ったら家族に今日学んだことやわかったことを伝えます。

→この子の父親は「少数色覚者を受け入れない職業」に就いている。母親はそのことを知っている。この子は医者から聞いたこととマンガで学習したことがまったく違ってビックリしたのだ。翌月、保健調査票に「色盲と言われました。(中2健診) 眼科医には行っていません。」と書いてきた。

マイナスイメージで「色覚多様性」に出会ってほしくない、これが私たち本を作った皆の願い。

9 おわりに

色覚問題を人権問題として捉えていく必要があると強く思っている。

なによりも必要なことは、皆が正しい認識を持つこと。それがない限り差別、人権問題はなくなる。

受講者の感想

○色覚のお話だったので、あまり身近なことではないなと思いながら参加しました。ですが、すごく深く掘り下げて分かりやすく説明していただき、「うーん」といろいろ考えさせられました。印象に残っているのは、「他と見方がちがうからこそ、生き残ってきた」という点です。少し捉えかたが違うかもしれませんが、「自分と異なる他者と共存することが人生を豊かにしてくれる」と理解しました。子どもが私にとってまさにそうです。大人と全く異なる存在の彼らたちがいたからこそ、今の自分の生活はとても豊かになりました。その視野をもっと広げると、さらに豊かな生活になるのだと思います。

○普段、何気なく見ていることが、こんなにも考えさせられるものだと改めて感じました。

私たちの小さい頃からも就職にひびくと聞いてはいましたが、それも個性と思うと何も問題はないように感じます。色覚検査の廃止が2002年ということは今日知りました。そして、その経緯も分かりやすかったのでよかったです。

- チョークの赤色が見えにくいというのは驚いた情報の1つで、よく授業等で重要ポイントの時に先生が使っていたことを思うと、分からない子どももいたのではと思いました。
- 正しい知識を啓発していくことが大事だと思いました。日常生活で困らないことも多くあるとは思いますが、自分の体のことを知ることも大切だと思います。そこからの自己選択になるので検査が一律に悪いとは断じ得ません。ただし、その前提条件に社会や環境が受け入れる土壌があることだと思います。日本人は皆同じじゃないと不安を感じるため差別的な表現になる原因となると思います。
- チョコちゃん流の「異常」の説明から、はっとさせられました。少数は異常ではないこと、無理解・知識不足ゆえに無意識に誰かを傷つけていること等を考えさせられました。人権問題に関してはアンテナを張っているつもりでいたけれど、全くの新しい情報ばかりでもっと多くの人に教えてあげたいと思いました。
- 「色盲」と聞くと、障害の一種という認識がありました。しかし、今日のお話を伺って、単に見え方の異なる「個性」であるという認識へ変わりました。日本人の考えかも知れませんが、「みんなとっしょ」が安心というか、「っしょでないと変わっている」という考えがあったことを改めて認識させられたようで、自分の意識を見直すいい機会となりました。
- 色盲という言葉と意味を間違っているとらえていたなと思い、大変勉強になりました。自分と違って見える方がいることは知っていましたが、正しい知識を知ることができてよかったです。子どもたちに早いうちから知ってもらいたいお話でした。
- 世の中に色があるのはなぜ？という問題など、改めて色について考える時間ができました。人の色覚は非常に多くのタイプや多様性があるといったことも知ることができてよかったです。これからもっと色覚について知っておきたいと思いました。
- 色盲という言葉が日常聞くことがなく、恥ずかしながら私も白と黒しか見えないという間違った知識を持っていました。しかし、今日の講演を聞いて間違えた知識であったこと、日本特有の文化が先行していたこと、また、少しの配慮で日常生活には困りがないこと、私たち多数派には見えない能力があることを教えていただきました。正しい知識を身につけることが大切で、間違った知識を持つと知らず知らずのうちに差別につながっていくということに気づきました。
- 今まで普通に社会にさまざまな色がある中で、「色盲」と言われてきた方たちは、とても辛く悲しい思いをしてきたということや異常ではなく個性だということを知ることができて、自分の子どもたちにもそれを伝えようと思いました。自分が当たり前に見えていた世界が他の人とは違って見えているかもしれないということを実感し、個性として広めていけたらと思います。

- 色覚について考えたことがなかったけど、良い機会になりました。1つのことで障がいといってしまうけれど、個性と捉えれば考え方も違うと思います。別府市は色覚検査を受ける人が全国に比べて多いということに驚きました。今まで深く考えていなかったので良い機会になりました。
- 色覚の検査は自由に受けることができるようにするべきだと思います。日常、あれっ？なんか見え方がみんなと違う気がする・・・と思って、子どもが不安な毎日を過ごすより検査によって少数色覚という自分の特性が分かったほうがその後の生活がスツキリ楽しくできると思うから。昔に比べると今はいろんな特性に対応できる時代になっている。
- 今まで色覚についての知識がなかったので、色覚異常がどんなものかなど考えたこともなかったです。今回、先生のお話を聞いて、色覚異常は障がいでもないということも分かったし、そういう人にも見えやすいカラーが教科書とかにも使われているということが分かりました。これから、私も、もう少し色覚について学びたいです。
- 色覚について初めて考える機会をいただきました。それぞれが個性であって異常や障がいではないということ、とても理解できました。一人一人のちがいを受け入れ合えることを自分自身もこれからまだまだ考えていきたいし、子どもにも伝えていきたいと思います。
- 「異常」ではなく「少数派」という言葉にはっとさせられました。正しい知識がないことが、知らず知らずに人を傷つけていることを再認識しました。色覚だけではなく他のいろいろな少数派のことも知りたいと思ったし、知っておくべきだと思います。
- 来る前は人権と色覚がどうつながるのか分からなかったが、確かに自分の中にも「色盲」という差別があったということに気づかされました。しかし、今回のお話で正しい知識を知ることができたことは本当によかったです。常識とは何かを考えるよいきっかけになりました。
- はじめて色覚についての話を聞かせていただきました。子どもたちの色覚について心配になることもあります。言葉で説明しにくい、分かりやすく説明することができないという現状があり、難しい問題だなと思っていました。学校等にこの話や内容が伝わっているのかという点とまだまだ伝わっていない点もあるのかと思います。是非、これからの子どもたちのためにこの内容が広く知れ渡ることを祈ります。一人でも多くの子どもたちが色覚で差別されることのないよう嫌な思いをすることがなくなりますように。
- 色覚について、今まであまり考える機会がありませんでしたが、捉え方で私たちの意識は少しずつ変わってくるものだなと、今日の話聞いて感じました。自分の色の見え方が他の人とはもしかしたら違うのかもしれないが、それは決して差別されるべき事柄にはならないということを今日学ぶことができました。
- 色覚障がいと作られた障がいということに驚きました。また、障がいという言葉を使うのではなく多数色覚、少数色覚という表現をすること、少数色覚の方には多数色覚の人には見えないものが見えるという優れた面があることも知り、実際にメガネを借りて見るこ

とで実感できてよかったです。まだまだ世の中には浸透していないと感じていますので学校に報告する際により詳しく伝えたいと思います。

- 実際、身近な方に色盲の方がいないと思っていますが、私が気づいていないだけで、自分なりに努力をされている方がいるかもしれません。そして、自分の子どもを含め、まだ気づいていない子どももたくさんいるのかも知れません。これから視点を変えて、今日の講演を参考にして、また手助けできていければと思いました。
- 色覚が人によって異なるということは、例えば、血液型が異なる、髪の色が異なるなどのようにタイプがあるというだけで、「異常」ではないと思います。多数派が強くなるのはどの時代・社会でも起こりがちなことですが、少数派が悪い、淘汰されるべきということではないと思います。タイプのちがいが存在するということを社会で認知してもらい、誰もが生きやすい世の中になるとよいと思います。
- 色覚について、今までいろいろ感じたことはありませんでした。私自身中2の時に検査しました。今日の話聞いて、色覚のことについて全部ではありませんが、理解できたと思います。また、体験できてどのように見えるのか理解できました。もっと詳しく知りたいと思いました。
- 色覚異常や色盲という言葉は知っていましたが、正確な知識は持ち合わせていませんでした。物の見方には違いがあるように、物の考え方や捉え方、バックグラウンドなど誰一人として同じものを持っている人はいません。その中で「同じことが良い」「みんなと違ってからおかしい」という考え方や自分中心の捉え方が差別を助長していくのだと思います。他者との違いを認め、受け入れられる気持ちを一人一人がもつことで社会全体が変わっていければと思いました。
- 色について考えたことが今までなかったのですが、これからは見え方が自分とは違う人もいるということを頭の片隅に置いておこうと思いました。私個人としては見え方が違うからその人がどうこうとは全く思っていなかったのですが、そのことで差別を受けたり選択肢が狭められたりしていると知って驚きました。特に不便なことがないのであれば治す必要などいらないと思いました。「みんな違っていい！！」です。
- 色覚についてあまり深く考えたりすることがなかったのですが、今日の講習を受けて、以前は見え方が違うというだけで、差別を受けたり制限されたりするなど、人間として脅かされることがあったのだと知りました。見え方が違うのは、マイナスな面で捉えがちだったが、プラスの面があり、おもしろいのではないかと思います。人間は同じ人はいないのでいろいろな感じ方や考え方、見え方があってもよいと思いました。
- 見え方にも違った見え方をすることがあるということが、今日の話で分かりました。一般的な見え方をする第3色覚というのに対し、第2色覚では赤色が見えにくく反対に緑色の人よりもよく見えるということが分かりました。そして、違った見え方ができるというのは逆にすごいなと思いました。私の息子は中2で色覚の検査をしました。多数派の色覚でしたが、考え方を改めて考えさせられました。

- 色覚のことは何も知りませんでした。色盲という言葉も聞いたことはあったのですが、何の知識もありませんでした。何も知らないことは、やはりいけないことだなと思いました。知らない世界が知れてよかったです。
- 色覚異常というと、普通に見えずにかわいそうだと思っていました。でも、今日の話聞いて、見え方が少し違う人と分かり、逆にすごいことだと考え方が変わりました。ユニバーサルデザインが広まって、すべての人が住みやすい環境にしていかなければと思いました。私にできることは限られていると思いますが、周囲に広めていきたいと思いました。
- 今回の学習で、色覚の捉え方が間違っていたことに気づかされました。以前、学校より色覚の本の案内やプリントを配布され気になっていたもので、今回このような話を直接聞くことができ良かったです。

※紙面の都合上、感想の一部を掲載しています。
講師に対するお礼の言葉等は省いています。